

# 中東諸国との経済交流深化に向けた わが国の取り組み



森 清 (もり きよし)  
経済産業省 通商政策局 中東アフリカ課長

## 1. はじめに

私は、補佐時代からエネルギー行政を担当することが多かった。1997年のCOP3（気候変動枠組条約第3回締約国会議）京都会議に始まり、トップランナー方式の省エネ法への導入、業種ごとのCO<sub>2</sub>削減行動計画、終了に向けた国内石炭政策、太陽光発電の普及や燃料電池車の開発、石油公団改革、サウジアラビアとの利権交渉、石油税から石油石炭税への改正など、さまざまな経験をさせていただいた。

2003年以降の7年間は、ロンドン（JETRO産業調査員）、資源エネルギー庁の国際戦略室長や国際課長、さらに現職（中東アフリカ課長）を通じ、いろいろな角度から、継続的に、中東やアフリカの人々と付き合っている。民間の方から見れば、7年間など短い。しかしながら、役人として、同じ地域の人々と継続的に仕事付き合いができるのは、結構珍しい。エネルギーや通商の世界では、カウンターパートの多くは、10年以上、同じポストに就いている。「ネットワークとしての政策マフィア」が自然と形成されている。日本側も、同じ人間が、継続的に、交渉や会談の場につくことは、非常に重要である。

## 2. 中東と日本とのこれまでの付き合い

次頁の指標を見ていただきたい。中東とのつながりは、まずは、「原油の付き合い」である。全体の9割近くが中東からの輸出である。原油価格の上昇により、ここ2、3年、「日本への輸入」に占める中東の比率は増加し、2008年は22%となった。天然ガスも、中東からの供給は4分の1程度だが、「イスラム圏との付き合い」という観点から考えると、その付き合いは8割近くとなる。

中東との付き合いのもう一つの特徴として、「日本からの輸出」

では中東のプレゼンスが少ない（約4%）のに  
比し、「プラント受注」では、中東は日本企業  
のビジネスのメッカとなっている。2005年など  
は、256億ドルのうち5割以上を中東が占めた。  
建設資材の市況軟化を受け、中東、とりわけ湾  
岸協力会議（GCC）諸国では、エネルギー関  
連のプラント受注が再び加速化する動きが見ら  
れる。

「日本からの投資」は、わが国の統計上は非  
常に小さい。しかし、例えば、サウジアラビア  
の統計で2006年に1位を記録するなど、見方次  
第では、目立ってきたともいえる。

日本の自動車は、中東で、相当のプレゼンス  
を占める。一方、家電製品は率直に言って、韓  
国製品に押されている。英米人のコンサルタン  
トは、中東の至る所で活躍しているが、中東の

企業や金融機関で活躍する日本人は一握りにす  
ぎない。これは、残念ながら、厳然とした事実  
である。「日本企業や日本人が中東にどれだけ  
本気で関心があるのか疑問だ」という英米コン  
サルタントも多い。

### 3. 新たな新興市場としての中東

中東は、市場として小さいといわれる。しか  
しながら、北アフリカを含む中東の2006年の  
GDP（国内総生産）は1兆ドルを超えた。中東  
湾岸諸国6ヵ国だけでも8,000億ドルで、ASEAN  
（東南アジア諸国連合）10ヵ国に肉薄している。  
中東の人口増加率は2%近くあり、ASEANの6  
億人を超える日も近い。20歳以下の人口が5割  
を超える社会においては、消費のマーケティング  
も従来の常識が通用しない。増加する一方の

#### 〔中東と日本との関係を示す指標〕

##### a. エネルギーのGCC依存

2007年：原油 74.2%（イラン 12.0%）、ガス 25.9%

2008年：原油 74.4%（イラン 11.9%）、ガス 24.5%

##### b. 中東から日本への輸入

2004年：6.8兆円（世界 49.2兆円）

2007年：13.4兆円（世界 73.1兆円）

2008年：17.4兆円（世界 79.0兆円）

##### c. 日本から中東への輸出

2004年：1.6兆円（世界 61.2兆円）

2007年：3.1兆円（世界 83.9兆円）

2008年：3.5兆円（世界 81.0兆円）

##### d. 日本から中東への投資

2006年：0.03兆円（世界 5.8兆円）（国内民間設備投資 85兆円）

2007年：0.11兆円（世界 8.7兆円）（国内民間設備投資 90兆円）

2008年：0.12兆円（世界 13.2兆円）（国内民間設備投資 86兆円）

##### e. 中東での日本企業のプラント受注（単位：10億ドル）

	2000年	01	02	03	04	05	06	07	08
中東	0.9	2.1	2.5	6.1	5.1	13.4	4.7	6.5	2.6
（世界）	15.3	12.4	14.0	18.7	19.1	25.6	17.6	23.6	15.8

学生や家から出にくい女性を中心に、エンターテインメントとしてのコンピューターやゲームソフトが継続的にブームを呼んでいる。

一方、財政面では、中東湾岸諸国は、2005-08年までの4年間で1.5兆ドルもの原油収入を得て、累積財政黒字も6,000億ドル近くに膨らんだ。政府系ファンド（SWF）だけでも、中東湾岸諸国合計で、約1.2兆ドル（控えめな見積もりとされる米国外交問題評議会の試算）と、そのGDPの規模を優に超す規模となっている。証券市場も、世界でいち早く回復を見せた。2008年10月からの半年で利用者が増加した空港は、上位10港中アラブ首長国連邦（UAE）のドバイ空港のみである。

中東は、GDPの約7割を石油や天然ガスの収入に依存している。財政に余裕のできた政府は、自分たちの政体（君主制や首長制など）を長期的に維持させ、安定した社会を実現するべく、争うように、石油依存型の経済構造を多角化しようとしている。彼らは、石油化学、金融、航空、石油代替エネルギーをはじめ、あらゆる先端産業や技術を貪欲に取り込もうとしている。

戦後、ゼロからスタートし、さまざまな産業発展に成功した日本に対する「思い」の背景には、こうした事情がある。日本にとっては、中東との付き合いをさまざまに展開していくチャンスでもある。一方で、アラブ民族はおしなべてプライドが高い。過剰な期待が相手方に失望を呼び起こす危険性もはらんでいる。

#### 4. 諸外国の動き

米国のオバマ大統領は、すでに4月にトルコとバグダッド、6月にエジプトやサウジアラビアを訪問した。ミッチェル中東特使が2ヵ月に1度の割合で、中東を訪問し、中東和平問題を議

論している。キミット財務副長官やガイトナー財務長官も、相次いで中東湾岸諸国を歴訪している。

欧州では、とりわけサルコジ仏大統領が、2009年に入ってからすでに3回も中東歴訪を行い、中東和平問題に積極的に関与するかたわら、原子力や戦闘機のトップセールスに余念がない。

2009年2月、胡中国国家主席は、2006年にアブドラ国王が国王就任後の最初の訪問地に中国を選んだ以降、2度目になるサウジアラビア訪問を行った。その際、両国間で、鉄道や資源などのMOU（覚書）を締結している。さらに、中国は、2004年に胡主席とアラブ連盟のムサ事務局長との間で、「中国・アラブ協力フォーラム」の枠組みに合意した。アラブ連盟の22メンバーとの間で、今までに、3度の閣僚会合と3度のビジネスフォーラムをそれぞれ1,000名の規模で実施している。イランとの関係強化にも積極的で、1994年にはたった8億ドルだった両国間の貿易額が2008年は300億ドル近くにまで拡大している。

わが国も見ているだけではない。2009年に入ってから、歴代の首相経験者（森首相、小泉首相、安倍首相、福田首相）に合計5回、中東を訪問していただき、各国首脳と会談をしていただいた。

アラブは、トップダウンで物事が決まる。官がビジネスに絡むことも多い。欧・米や中国は、それを熟知し、トップダウンで対応しようとしている。日本も、首脳外交や閣僚外交をいかに頻繁に作り上げていくかが、非常に重要である。

#### 5. 中東とのこれからの付き合いのカギ

2008年の1月、私は、当時の甘利経済産業大

臣とUAEのアブダビ首長国に出張していた。その時、アブダビのムハンマド皇太子は、甘利大臣に対し、以下の発言をされた。

「日本は世界に伝えるべきメッセージを持っている。日本は島国で、かつ何百年にわたって鎖国をしていたが、開国してからは、さまざまな教訓を学んだ歴史を持つ。日本人は勤勉で何かを達成しようという強い決意を持っている。日本人のそうした気質、性格がどこから来たのか、私はぜひ知りたい。私は日本から多めに勉強したい。」

ムハンマド皇太子だけでない。中東、とりわけ湾岸諸国の首長家のトップの方々の中で、日本の文化や伝統に非常なる関心を示す方が大変多い。キーワードとしてよく用いられる言葉は、「規律（ディシプリン）」である。

このキーワードは、今後の中東との付き合い方を考える上で、非常に重要な意味を持つ。

## 6. 具体的な経済交流の方向性

中東の各国は、日本の例に倣い、産業多角化を早急に進めようと躍起になっている。最近の中東諸国は、明らかに、そのためのサポートを日本に要請している。資源外交も、資源だけの貸し借り関係だけでは済まなくなっている。協力の対象として挙げられた分野は、教育を筆頭に、再生可能エネルギーや原子力などの石油代替エネルギー、観光や航空、さらには、金融と非常に幅が広い。ただ、残念ながら、今までは、日本が他国に先駆けて協力関係を築くといった事例が少ない。原子力など、先行する他国を必死になって追いつけている状況である。教育でも、日本人学校への現地生徒の受け入れや公文式の普及から、各種大学設立に向けたアドバイスなど、個々のプロジェクトでは頑張っている。

が、大学教育では、それがビジネスとして産業化されている欧米に水をあけられている。

ただし、そう悲観ばかりしている必要もない。

2007年から始まったサウジアラビアとの産業協力のスキームは、日本が世界に先駆けて作った枠組みである。アブダビとの間でも、エネルギー、金融、教育、航空など重層的な協力関係を構築しつつある。彼らはトップが複数の分野の役職を兼務していることが多く、重層的な関係は、さまざまな個人的な貸し借りを作り上げる。

太陽光発電や海水の淡水化、各種のプラントエンジニアリングなど、日本の技術に対する信頼性は非常に高い。コンピューターの普及に伴い、アニメやゲームなど日本の文化が出回っている。日本の100円ショップ的な店も信頼を勝ち取っている。「日本製品＝自動車とカメラ」というイメージから、着実に多様化が進んでいる。

日本の大手企業、金融機関も、中東のSWFに1~2%程度の株式を保有されることに、抵抗感は無くなっている。というより、それをてこに、関係の強化を図る動きも見られる。

数年先の完成を目指して、中東湾岸諸国内の電力送電網の整備が計画されている。さらに、そのまた数年後には、湾岸諸国内の鉄道網整備も検討されている。

中東地域のSWFは、最近、自国回帰が進み、自国の産業発展に寄与するプロジェクトへの投資の比率をさらに増やしつつある。

私は、こうした資金と、日本の技術がうまく結び付き、システム設計の段階から運営まで、日本企業がプロジェクトの全体に関与し、継続的に収益を上げるというビジネスモデルを、研究会方式などにより、官民で検討していくことが望ましいのではないかと考える。日本の企業

は、設計からプロジェクトの立ち上げ、施工、さらに運営と、別々の会社が関与する傾向が強い。従って、システムを一括して、いわば丸投げしてくるような契約には、日本は、統率の採れた責任体制を構築することが難しい。システムの一部を担うビジネスは、日本の企業は得意であり、それぞれが動けばよい。しかしながら、システム全体を勝ち取るビジネスは、中東の場合には、相手が、公的企業であったり、政府そのものであったりする場合が多い。日本側も官と民とが連携する必要がある。

以上述べてきたように、中東諸国は、「急速に若年層の人口が増える中で、彼らの社会生活を保証する形で、インフラを整え、かつ、産業の多角化を進めていく」という命題を持つ。欧米のコンサルタントを従える彼らの要求水準は、ますます厳格になる。一方で、彼らは、日本の発展モデルと日本人の精神性（規律）を非常に評価している。こうした中で、「どのように彼らのトータルな要求を受け入れた形で、ビジネスの提案をするか」という「提案力」が、極めて重要になる。

中東での資源権益の確保は、エネルギー安定供給だけでなく、うまくいけば、非常に利益率の高いプロジェクトになる可能性を秘めている。こうした資源確保に当たっても、原油だったら原油だけでなく、もっと多面的な経済交流の深化があって初めて、交渉が可能となる。中東との関係は、ますます「こんがらがって」おり、当事者でしか糸をほどこくことができない状態を作り上げることで、初めて、そこから、さまざまなビジネスが実を結ぶのではないかと私

は考える。

## 7. おわりに

### ～日・アラブ経済フォーラム～

アラブ男性は、商談を始める前に、相手方（ただし、男性に限る）としばらくの間、手をつないで談笑を行う。これを自分から率先して行う日本人男性は、まだ、少ない。アラブ女性とのビジネスは、まだまだ、これからである。

12月7日、8日に東京において、初めて「日・アラブ経済フォーラム」が開催される。外務省と経済産業省のほか、日本経済団体連合会をはじめ各民間団体にも、主体的に準備に参画いただいている。本件は、2004年以降、再三にわたって、アラブ側から要請されてきたものに応えたものである。当日は、「投資のための金融」「水」「太陽光発電」「環境（リサイクル）」「基礎産業」「観光」、さらには「農業」や「コンテンツ産業」など、さまざまな分野で、アラブの政府関係者や代表的な企業家と、日本のビジネス界との間で活発な意見交換がなされることが期待される。

中東のビジネスの手法は、まだまだ日本では、限られた企業にしか知られていない。しかしながら、欧米企業がそれを熟知しているかというところでもない。なぜなら、中東のビジネス手法そのものがどんどん変ぼうしているからである。当省としても、そうした中東ビジネスへの攻め方について、民間ビジネスの方々から実態に即したご意見を賜りつつ、探究していきたい。

JF  
TC